

若者は「空気」ではなく「流れ」を読む

KY は死語

LINE ではなく Instagram の DM へ変遷する

LINE という個人間のやりとりから Twitter や Instagram の DM が日常へとなりつつある現代の若者^{*1}には、TL(TimeLine) という全体の流れへの無意識的な迎合があり、その流れを乱すこともまた無意識的に忌避する傾向がある。

“流れ” はベクトルだが” 空気” はスカラー

場が形成する全体感を多くの場合「空気」と形容されるが、「流れ」は「空気」と異なり指向性を持つという点
が異なる。

いわば、空気の変化量であり、空気を微分したものが流れであり、流れを積分すれば場 (の変遷) ということ
になる。

そのため「空気が変わるが流れは変わらない」行為は発生可能 (真) である。

「空気が変わる」というベクトル (流れ) がそこにあったのであり、空気が変わったという流れを察知した周囲
がそれに同乗することで指数関数的に流れは変わっていく。

ただ、この最初の空気を変える行為は所謂ファーストペンギン^{*2}であり、一定のリスクを負うと同時に我田引
水や今後のイニシアチブを握ることもありジレンマが発生する。

では「流れが変わるという流れ」について考える。しかし「流れが変わるという流れ」に対しては、「流れが変
わる」と「流れが変わらない」を比較し優勢な流れに乗ずるという点でやはり「流れを読む」と言える。

この時、空気としては「流れを変えない」というものであったとしても、自らもしくは周囲に「流れが変わ
る」と思うに至る要因を見出した場合、「空気を変える」という選択を行う。

これは「空気を読まない」という空気とも言えるが、空気は全体で醸成され方向性がないのに対して、個人な
ど起因要素が少なくとも「流れが変わる」という指向を持つ可能性を選択する点で異なる。

ここで「流れ」があまりにも万能であるかのように映るが、場の空気を変えるものであるという変数として捉
えている以上、至極真っ当と言える。

つまり、関数 $f(x)$ が区間の各点で微分可能なとき、 $f'(x)$ の値を x の関数と考えることができ、 $f(x)$ の導関
数である $f'(x)$ を定義できる。

同様に $f''(x)$ も定義できうるが、ここでは机上に載せない。

^{*1} 過去には“LINE 離れ”が Twitter でトレンドに入った

^{*2} ペンギンは常に集団で行動するが群れを統率するリーダーはおらず、最初に行動を起こした 1 羽に皆が従う習性があることから転
じた

TL(TimeLine) 文化

文化形成

流れを尊重する思考の源流は SNS の TL に由来すると考える。TL は自らが選択したもので形成されるため、真に大衆 (=マジョリティ) の意見ではないが、観測者から見れば (大勢の人=) マジョリティになる*³。

その仮のマジョリティは自らの選考が反映されていることもあり、そこから逸脱することは自らを否定することに繋がりがねない。

自らが正しいと選んだもの (他者) の形成するものが正しいとは限らないにも関わらず、正しいと選んだ自分を否定することができないがために、進行する流れへの無意識的かつ盲目的な信仰のみを体勢として残す傾向がある。

また、TL に流れてくる情報は膨大であり、その発信源たるフォロワー (フォロワー) を定期的にリフレッシュする人はそう多くないことからわかるように、単純な数の問題もあると考える。

また、フロイトの精神分析における同一化 (同一視, Identification) などともこれらに関連があると思われる。

文化波及

自らの鏡面作用が流れを尊重する思考の所以だと論じたが、この鏡面作用がなくとも流れは尊重されるようになりつつある。

この姿勢の形成には以前から論じられている「空気を読む若者文化」*⁴の豊かな土壌が反映されていると考える。そのような流れに乗れない、乗らない、合わせない、行為への忌避感情は、その流れの形成要素に自らがなくとも、TL という文化そのものが自らが生成していない方向へと流れうる可能性や、自らの制御下にないという性質と同様のものへの近似的に作用していく。そして結果的に、自らが関与していなくとも関連している場所には敷衍されていき、最終的に流れに合わせるものが規範意識となってしまう。

流れへの配慮は場に対して積極的でないことにつながるが、消極的でないことを必ずしも肯定しない。

流れへの無意識的かつ盲目的な信仰は自らが関与していない流れへの信仰へも波及し、司会や調整役が自らを指名しない限り目立たないように振る舞う若者文化を醸成した。

既存の若者文化 (論?) との比較

これは、“出る杭は打たれる” 的発想*⁵とは「水を向けられれば積極的になる」という点で根本的に異なる。

この発想は特に日本的であると揶揄される場面もあり、それには同意するところも大きい*⁶。

ただ、この目立つものは否定されるという考え方自体も、既に近年の意識から離れた部分も過分にあると感じており、他人事は他人事というドライな考え方の流行や、マイノリティや個性の尊重文化もそれらを反映していると言える。

また、“空気を読む” という文化とも空気が暗黙的であることと比較して「明示的规则は尊重する」という

*³ フィルターバブルやサイバーカスケード、沈黙の螺旋については説明不要

*⁴ 『現代用語の基礎知識』では 03 年版の「若者用語」のコーナーにはじめて「空気読めよ」が採用されている

*⁵ 松下幸之助「出る杭は打たれるが、出すぎた杭は打たれない。」

*⁶ アメリカの諺「The squeaky wheel gets the grease (音をたてる歯車は油をさしてもらうことができる)」

点で大きく異なる。

先述の例を引けば、司会や調整役が自らを指名しない限り目立たないように振る舞うが、水を向けられれば積極的に発言や質問を行うという若者文化になる。

また、つまり、明示的に自らにプライオリティやルール、機序がある場所であれば、空気を打ち破ることも流れになるのである。

これはヴィトゲンシュタインにおける言語ゲーム論^{*7}に通ずるものが感じられる。

TL と DM(DirectMessage)

SNS における TL と DM の関係性はこれらの文化の背景に大いに関わっているといえる。

DM(関係構築) のみで成立するのではなく、TL(流れ) から DM(関係構築) を送る相手を選択する。

DM を既に送ったことのある (既存の繋がりのある関係) と、TL から選択された新規 DM 相手 (流れの中で見出した自らの希求の対象) のみで DM(関係構築) を行う。

ただ、TL(流れ) の構成要素全てと DM(関係構築) をすることで TL(流れ) を知ろうとすることはなく、あくまで TL(流れ) にはいるが DM(関係構築) をしないメンバーが存在する。

TL(流れ) に興味はあるが、TL の構成要素には興味がなく、TL の方向性に神経質になる。

^{*7} 説明不要